

人文主義者のヒトラー像

——序 ヒトラー像の変遷

大川 勇

いつの頃からであろうか、気がつく、ナチズムおよびヒトラーに対する見方が大きく変わっていた。

かつて、ナチズムはホロコーストをもたらした絶対悪であり、ヒトラーはナチズムを先導する極悪非道の独裁者であった。『ニヒリズムの革命』（一九三八）においてヘルマン・ラウシュニングが断定したように、ナチズムの本質は「幻想をもたないニヒリズム」であり、ヒトラーはいかなる理想も理念もたずに自己目的に権力を追求する冷酷な機会主義者^{オポチュニスト}であった。このナチズム観、ヒトラー像は、エーリヒ・フロムの『自由からの逃走』（一九四一）、フランツ・ノイマンの『ビヒモス』（一九四二）に受け継がれ、戦後もジャン・F・ノイローの『第三帝国の神話』（一九五七）、クルト・ゾントハイマーの『ヴァイマル共和国における反民主主義的思考』（一九六八）に継承された²。

それがいつしか、ヒトラーの「理念」や「世界観」について語られるようになった。ヒュー・R・トレヴァーローパーが「ヒトラーの戦争目的」（一九六〇）において、「生存圏」の獲得こそ、ヒトラーがその生涯をかけて追求した政治目標であったと述べたのを皮切りに、ハンス・J・グンター・ツマルツリクは「歴史問題としてのドイツの社会ダー

ウィニズム」(一九六三)で、ヒトラーの「世界観」の根底にあるのは俗流ダーウィニズムであると指摘⁽³⁾し、エーバーハルト・イエツケルは『ヒトラーの世界観』(一九六九)において、「民族価値、人格価値、自己保存衝動」を追求するためにユダヤ的「国際主義、民主主義、平和主義」と闘争するという考えが、ヒトラーの「世界観」の中核をなしていると論じた⁽⁴⁾。さらにその後、フランク・ロタール・クロルの『イデオロギーとしてのユートピア』(一九九九)で、ナチズムはポリシェヴィズムと並ぶ「二十世紀の第二の全体主義的理念運動」(die zweite totalitäre Ideenbewegung des 20. Jahrhunderts)⁽⁵⁾と見なされ、ヒトラーのみならず、ローゼンベルク、ダレー、ヒムラー、ゲッベルスらの「理念」と「イデオロギー」が考察の対象とされるにいたったのである。

ヒトラーには理念も世界観もないとしたラウシュニングのテーゼはこうして否定され、かつて読む価値もなければ、そもそもその内容の空疎さゆえに普通に読むことも難しいとされていた『わが闘争』(一九二五/二七)が、戦後出版された『ヒトラーの第二の書』(一九六一/成立一九二八)とともに、ヒトラーの世界観解明のための第一級の史料と見なされることになった。そして、この転回と連動するように、かつて冷酷な機会主義者であったヒトラーの人間的「魅力」と、残虐なテロを遂行したナチズムの「魅惑」が、声高に論じられるようになった。

たとえば、ヒトラーの伝記的研究として時代を画したヨアヒム・フェストの大著『ヒトラー』(一九七三)は、その冒頭で「ヒトラーの奇妙な偉大さ」⁽⁶⁾について語っている。「彼ほど多くの歓喜と興奮と救済の期待を呼び起こした者はいなかった。彼ほど多くの憎悪を呼び起こした者はいなかった」——この一見背反するかに見えるヒトラー像の中に、フェストは「歴史的偉大さの要素」⁽⁷⁾を見る。一個の人間としてのヒトラーは、たしかに偉大さの要件を満たしてはいない。「この男特有の陰鬱で本能にしばられた無数の性格、その容赦のない復讐心、寛容の欠如、薄っぺらで剥き出しの物質主義」⁽⁸⁾は、あまりの下劣さに嫌悪をもよおさせる。しかし、時代が彼を捉えた。ヴェルサイユ条約への憤怒と共産

主義革命への恐怖、さらにはインフレーションと世界恐慌による経済的没落への絶望といったヴァイマル共和国における社会不安が、不機嫌で苛立った人々を、こうした社会問題を一挙に解決してくれるかに見える「指導者」のもとに走らせた。「そうした多くの憧憬と不安とルサンチマンの結節点として、ヒトラーは歴史の人物となったのである」⁽⁹⁾。ヒトラーは人間として、あるいは個人として偉大なのではない。「偉大さとは、悲惨な時代の要請である」とヤーコプ・ブルクハルトは言ったが、「この偉大さが個人としての卑小さとも共存しうる」ことを教えてくれたのが、ヒトラーという現象なのである。ヒトラーはこれまでの伝記作者が言うような「悪魔的誘惑者」などではなかった。ヒトラーを「歴史の人物」にしたのは、彼の「超人的能力」でも「デモニッシュな特性」でもなく、時代精神ないし時代の流れと一致した「いわば〈普通の〉特性」なのだ。⁽¹¹⁾その証拠に——とフェストは言う——ヒトラーの個人的特性には、私たちの関心をひくものがほとんどない。「この人物は何年もの間、奇妙に蒼ざめ、無表情のままである。時代と接触してはじめて、彼は緊張と魅力（Faszination）を獲得するのである」⁽¹²⁾（傍点筆者）。

J・フェストの『ヒトラー』は、「普通の」人間としてのヒトラーがもつ「魅力」について早い段階で言及した作品であるが、以後もゼバステイアン・ハフナーが『ヒトラー注釈』（一九七八）において、六百万人の失業者にパンと仕事を与えた、いわば「普通の」政治家ヒトラーの「功績」を強調し、⁽¹³⁾先述した『ヒトラーの世界観』の著者E・イエツケルもまた、その後の講演「ヒトラーとドイツ人」（一九七九）で、「ドイツ人はヒトラーのことを恐れたというよりも、むしろ愛した」と述べた。「ドイツ人がある種の暴君に対するように、彼に対して疑いを抱き、苦悩し、激昂することはなかった」、「ドイツ人のヒトラーに対する態度の根底にあったのは、賛美や尊敬、まして恐怖などではなかった。」「……」それはちょうど子供が愛する父親にみせる心服のようなもの」であった、と。⁽¹⁴⁾近年では、池田浩士が『虚構のナチズム』（二〇〇四）において、「ナチズムの本質的な魅力」について語っている。

池田が注目したのは、ナチス・ドイツの残虐行為が明らかになった一九四五年五月以降もなお、「あの時代は良かった」と懐かしむドイツ人が少なからずいたという事実である。その理由を池田は、ノルベルト・フライの論文「民族共同体と戦争——ヒトラーの人氣」(二〇〇一)に依拠しつつ、次のように述べる。ヒトラーが民衆に支持されたのは、ひとつには、日常生活のレベルで民衆が社会的平等感を実感できるような政策をヒトラーが実行したからである。それはたとえば、「歓喜力行団」(Kraft durch Freude)の会員が週に五マルクの積立貯金をすることで一〇〇〇マルクの自家用車を手に入れられるようにするという政策であったが、社会的身分の隔たりの大きいドイツ社会にあって、一般大衆が自家用車を持てるようになるというのは、それだけで「ばら色の未来の指標」となりえたのである。さらにもうひとつ、経済生活を超えたレベルでの、生きがいや社会的連帯感に関わる理由があった。それはヒトラーが、ザール地方とラインラントを解放し、オーストリアとズデーテン地方とメーメル地域を奪回するという外交上の成果を収めた、しかも一滴の血も流すことなくそれをなし遂げたことで「ヴェルサイユの屈辱」を解消し、ドイツ人としての誇りを取り戻すことができたことであった。池田によれば、この二つの理由が有機的に作用し、「ドイツ人」であることの誇り、社会的な連帯感、等々を、単なる精神主義のスローガンにするのではなく、実生活の手応えに根ざした理念として、まさしく実感として人びとにいだかせたことこそが、ナチズムの本質的な魅力⁽¹⁵⁾だった」(傍点筆者)。

『虚構のナチズム』には、一九二〇年代末のナチ党のポスターが図版として収録されている。⁽¹⁶⁾そこに記された「我が最後の希望、ヒトラー」(Unsere letzte Hoffnung: Hitler)という言葉について、池田は別の書で次のように言う。

ナチズムという歴史的なテーマと向き合うとき、それが主観的には革命を目指す社会運動だったという事実を、看過することはできない。そして、この革命というのが、破壊と殺戮と抑圧支配との代名詞などでは決してなく、抑

圧からの解放と豊かさの実現を、新しい秩序と新しい倫理との建設を、目標として掲げるものだったことを、まず直視する必要があるだろう。そしてまた、この運動の担い手たちの姿を、もっぱら嗜虐的な人格破壊者や殺人狂やゴロツキや暴漢たちとしてののんびり描くとすれば、それは実像とはほど遠いと言わなければならない。権力の座にあった十二年半のあいだにかれらが行なった所業のおぞましさを、あらかじめ多くの有権者が予測しえたわけではまったくなかった。それどころかむしろ、ヒトラーとその運動はヴァイマル共和国末期のナチ党のボスターのキャッチフレーズ、「我々が最後の希望、ヒトラー」という文句そのままに、あらゆる幻滅と政治不信のあとの唯一の希望とさえ考えられたのであった。⁽¹⁾ (傍点筆者)

「主観的には」という留保をつけてはいるが、ナチズムが「抑圧からの解放」と「新しい秩序と新しい倫理との建設」を目指す革命運動であったことを事実として認め、ヒトラーのなし遂げた政治・経済・外交上の成果がドイツ人としての誇りを取り戻させた、そうした「実生活の手応えに根ざした理念」(傍点筆者)を広汎な大衆に浸透させたことが「ナチズムの本質的な魅力」だったと、池田は言うのである。この池田の見解は、ラウシュニングのテーゼが否定され、ヒトラーの「理念」や「世界観」が認知されていく過程と連動して、ナチズムの「魅力」が語られるようになるという、これまで見てきた経緯のひとつの終着点と言っていいだろう。

では、そうした「魅力」や「希望」を多くのドイツ人にあたえたヒトラーとは、どのような人物だったのだろうか。「嗜虐的な人格破壊者や殺人狂やゴロツキや暴漢たちとしてののんびり描く」ことが決定的な誤りであるとされるその「実像」とは、いかなるものなのだろうか。

『虚構のナチズム』から三年後、池田とは別の角度からナチズムの「魅惑」を語る書が現れた。田野大輔の『魅惑す

る帝国』(二〇〇七)である。「政治の美学化とナチズム」という副題をもつこの書で、田野はこれまで形成されてきた「ヒトラー＝カリスマ的指導者」のイメージに疑問を呈する。「ヒトラーを超人に仕立て上げ、総統崇拜を制度化した」のはゲッベルスであるが、「彼のつくりあげたヒトラー像を民衆が無批判に受け入れたかどうかは非常に疑わしい」⁽¹⁸⁾と。

田野によれば、第三帝国の写真報道官ハインリヒ・ホフマンの撮影したヒトラーの肖像は、その「何者も寄せつけないような冷然とした態度」⁽¹⁹⁾で公的なヒトラー像の形成に大きな役割を果たした。また、レニ・リーフェンシュタールの「救世主の到来」⁽²⁰⁾のイメージが重ねあわされている。だが——と田野は言う——リーフェンシュタールの『意志の勝利』はヒトラーを英雄として理想化する一方で、ヒトラー自身の笑顔と、ヒトラーを迎える民衆の笑顔を数多くとらえている。そこに見られる民衆は、「独裁者に忠誠を誓う従者」というよりもむしろ、「アイドルに声援を送るファン」⁽²¹⁾の姿に近い。この点に着目した田野は、H・ホフマンの写真集の中にも、笑顔で民衆とふれあう「人間味にあふれたヒトラー像」⁽²²⁾を見いだす。また、ヒトラーを目撃した人々の中から「彼が普通の人間に見えた」という証言を拾い集める。

多くの人々は、実物のヒトラーを見てばつとしない印象しか受けず、公式のイメージとの落差に驚きととまどいを覚えたのだった。とはいえ、こうした印象がヒトラーの魅力を高めていたことにも注意しておかねばならない。彼を見て「かわいい人ね」と述べた女性の例が示すように、ありふれた人物に見えたからこそ愛着を感じた者もいたのである。⁽²³⁾ (傍点筆者)

残酷な殺人狂でもなければカリスマ的独裁者でもない、「普通の人間」としてのヒトラー、しかもそれゆえに人間とし

ての「魅力」を周囲に放射するヒトラー——このヒトラー像に潜むものを、田野はリチャード・セネットの言葉を借りて「親密さの専制」と呼ぶ。マックス・ヴェーバーが定義した非凡な力としてのカリスマとは異なり、「平凡化する力」としてのカリスマは、英雄的ないし悪魔的な資質を必要としない。逆に「ありふれた人物」にのみ可能な「親密さのイメージ」を呼び起こすことによって、この「世俗のカリスマ」は民衆に愛されつつ、民衆を支配するのである。⁽²³⁾

その証拠として、田野は「国民的キッチン」(nationaler Kitchn)の存在を持ち出す。それはたとえば、ハーケンクロイツのマーク入りの灰皿であるとか、ヒトラーの絵のついた紙コップといったものだが、ナチ党の権力掌握とともに、ドイツにはそうしたナチ関連グッズがあふれた。田野は二葉の写真でその具体例をいくつか提示しているが、その中でとりわけ目を引くのは、ヒトラーの顔をかたどったピアジョッキである。ピアジョッキの胴体部分がまるまるヒトラーの顔になっているという悪趣味な代物であるが、大きく目を見開いたヒトラーの表情にはどことなく現代の「ゆるキャラ」を思わせる愛嬌があり、それがヒトラーを嘲弄するために作られたものではないことがわかる。⁽²⁴⁾あるいはまた、「小さな子供も彼に近づく」というキャプションのついた写真があり、そこには満面に笑みを浮かべた三歳くらいの女の子が——まるで「ヒトラーおじちゃん」と語りかけているかのように——両手を掲げてヒトラーに歩み寄る姿が写し取られている。⁽²⁵⁾「国民的キッチン」の氾濫を党と国家への冒瀆と見なしたナチ党がその撲滅キャンペーンをはったにもかかわらず、ゲッベルスの宣伝省は事実上それを黙認したという事実、⁽²⁶⁾また、そのゲッベルスが「總統の人間的魅力」を伝えることに精力を注ぎ、わけてもくり返し「ヒトラーがいかに深く子供を愛しているか」を強調したという事実は、⁽²⁸⁾ナチ党の中核にいた人間が、ヒトラーの「親密さのイメージ」をどれほど重要視していたかを物語っている。ヒトラー自身、自分が独裁者の印象をあたえないよう十分に注意していた。自ら「無名の兵士」「一人の労働者」を名乗り、素朴で謙虚な人間であることを事あるごとに強調した。⁽²⁹⁾それが成功したのであるう、「連日何千ものファンレターや贈り

物がヒトラーのもとに届けられ、しばしば女性からラブレターが寄せられた⁽³⁰⁾という。この「世俗的カリスマ」は、その「親密さの専制」によって、「笑顔をふりまくスター政治家⁽³¹⁾」となったのである。

田野の描くこのようなヒトラー像は、J・フェストの「普通の^{ノルマル}」人間としてのヒトラー像を発展的に継承し、E・イエツケルの、子供に愛される父親としてのヒトラー像——「ドイツ人はヒトラーのことを恐れたというよりも、むしろ愛した」——に内実をあたえたものとして特筆に値する。それは歴史社会学の大胆な構想と緻密な実証的研究に基づくものであり、改めていうまでもなく、歴史修正主義の立場から導かれたのではない。田野の研究は、池田と同じく、ナチズムの「魅惑」を直視することなくして真にその危険性を認識することはできないという確信に支えられている。しかし、そうであればこそ、私はかつてのヒトラー像、ナチズム観との落差に戸惑うのである。たとえば、『カルヴァンに抗するカステリヨ、あるいは権力に抗する良心』（一九三六）において、ジュネーヴの独裁者カルヴァンの恐怖政治を弾劾し、それによって反ヒトラー、反ナチズムの姿勢を鮮明にしたと見なされたシュテファン・ツヴァイクは、ヒトラーの「実像」を見誤ったのだらうか。あるいはまた、『ドイツの破局』（一九四六）において、ヒトラーの仕事を「世界史における悪魔の原理の発現」(Durchbrüche eines satanischen Prinzips in der Weltgeschichte)⁽³²⁾と呼んだマイネッケは、大衆に愛される人気政治家としてのヒトラーを見る機会がなかったのだらうか。

そうではあるまい。彼ら、ドイツ、オーストリアの作家、学者、知識人が見たヒトラーと大衆の見たヒトラーは、同じ人物でありながら異なる相貌を呈していた、ということであろう。本稿においてこれまで見てきた、ヒトラーの「魅力」とナチズムの「魅惑」を解析する論考の著者たちは、当時世界で最も民主的と言われたヴァイマル憲法の下でヒトラーとナチ党が合法的に権力を掌握できた理由を説明しようとし、そのために、有権者たる大衆の目に映ったヒトラー像にスポットを当てたのである。だから池田はナチ党の国政選挙での得票率が最高でも四三・九パーセントに留まった

事実を強調し、本来阻止できたはずのナチズムの運動を阻止できなかった理由について次のように述べた。

ナチズムの運動が現実の力を持ちえたのは、それが人びとの夢や希望を、いわば土壤とし養分として生きたからである。それゆえにまた、ナチズムそのものが、ナチズムにもとづく政治・社会体制そのものが、大きな虚構でしかなかったのである。ナチズムにたいするボイコットや反対は、この虚構を撃つことができなかった。虚構は、現実に現実に現実的な力を持っていた。そのデマゴギーを論理的に批判し非難することで、ナチズムの虚構を撃つことはできない。(傍点筆者)

田野もまた、「笑顔をふりまくスター政治家」というヒトラー像を強調する一方で、その同じ人物が「邪悪で冷酷な独裁者」でもあったことを忘れてはいない。

だが、ヒトラーという一人の人間が、見る主体によって異なる相貌を呈していたとして、その主体は、大衆と知識人という二分法の枠組みに収まるだろうか。そんなはずはない。J・P・スターンは『ヒトラー——総統と民衆』（一九七五）の冒頭、こんなエピソードを伝えている。

ミュンヘン大学の歴史学の教授カール・アレクサンダー・フォン・ミュラーは、一九二三年十一月八日にビュルガーブローイ酒場で行なわれたヒトラーの演説を聞いて、ヒトラーの「決して忘れることのできない子供のように率直な喜びの表現」にすっかり圧倒されたことを告白している。

その一方で、同じミュンヘン大学のミュラーの同僚で民族衛生学の教授だったマックス・フォン・グルーバーは、一九二四年二月のヒトラーの反逆罪裁判に証人として出廷した際、ヒトラーの印象についてこう語ったという。

私はヒトラーを初めて側近くに見た。顔と頭——劣等人種、雑種。卑しい、後退した額、醜い鼻、横に張った頬骨、小さな目、黒い髪。顔の表情——完全な自制をもって命令を下す男のそれではなく、狂気じみた興奮をする男のそれ。⁽³⁶⁾

同じ大学の教授——片や歴史学、片や民族衛生学——にして、しかもきわめて表層的なヒトラーの身振りや容貌に関して、受け取る印象がこれだけ違うのであれば、ヒトラー像を描く主体を〈大衆と知識人〉に分類することなど、ほとんど無意味だろう。

それ以前に、すでに私たちは、少なからぬ作家、学者、知識人がヒトラーの権力掌握によって亡命を余儀なくされ、あるいは「国内亡命」という形でナチズムに抵抗した一方で、それよりもはるかに多くの作家、学者、知識人がナチズムに積極的に、もしくは消極的に加担したことを知っている。両者の道を隔てたのは何だったのか。

それを探求する手がかりを、私たちは彼らのいだったヒトラー像に求めようと思う。ナチズムが「人びとの夢や希望」を養分として生きたとして、その「人びと」は大衆には限らなかつたはずである。だがどのような夢と希望をナチズムに託し、誰が託さなかつたのか——その答は、彼らがいだし、表現したヒトラー像の中に読み取ることができるであろう。その際、私たちは、ヒトラー像解説のための補助線として、人文主義の精神を用いたいと思う。シュテファン・ツヴァイクが『カルヴァンに抗するカステリヨ、あるいは権力に抗する良心』（一九三六）において、ジュネーヴの独

裁者カルヴァンの恐怖政治を弾劾した人物としてバーゼルの人文主義者セバステイアン・カステリヨを選び、主人公としたのは、おそらく偶然ではない。骨の髄まで人文主義の精神に浸されたカステリヨの栄光と悲劇を描くことで、ツヴァイクはナチズム（ないしファシズム）の時代の知識人の生き方を検証しようとしたにちがいない。それぞれのヒトラー像の中に見いだせる人文主義／反人文主義の精神を解析することによって、あの時代を生きたドイツ知識人の希望と絶望を読み取ること——それがこれから始める「人文主義者のヒトラー像」の構想である。

附記

本稿は、連作として構想された「人文主義者のヒトラー像」の序文である。

註

- (1) Rausching, Hermann: Die Revolution des Nihilismus. Neuausgegeben und mit einer Einleitung von Golo Mann. Zürich 1964, S.57. (ラウシュニング、ヘルマン『ニヒリズムの革命』、菊盛英夫・三島憲一訳、筑摩書房、一九七二年、三四頁。)
- (2) 大川勇「教養理念としての保守革命——ホーフマンスタール『国民の精神空間としての文書』における「探求者」をめぐる」、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』第五三号、二〇〇八年、三頁以下を参照。
- (3) 中村幹雄『ナチ党の思想と行動』、名古屋大学出版会、一九九〇年、一四頁以下。

- (4) Jäckel, Eberhard: Hitlers Weltanschauung. Entwurf einer Herrschaft. Tübingen 1969, S.129ff. (イエツケル、エバーハルト『ヒトラーの世界観——支配の構想』、滝田毅訳、南窓社、一九九一年、一〇〇頁以下。)
- (5) Kroll, Frank-Lothar: Utopie als Ideologie. Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich. Paderborn 1998, S.11. (クロル、フランク・ロタール『ナチズムの歴史思想——現代政治の理念と実践』、小野清美・原田一美訳、柏書房、二〇〇六年、一五頁。)
- (6) Fest, Joachim C.: Hitler. Eine Biographie. Frankfurt am Main/Berlin/Wien 1973, S.17. (フェスト、ヨアヒム『ヒトラー(上)』、赤羽龍夫・関楠生・永井清彦・佐瀬昌盛訳、河出書房新社、一九七五年、七頁。)
- (7) a.a.O., S.19. (同書、九頁。)
- (8) a.a.O., S.20. (同書、一〇頁。)
- (9) a.a.O., S.22. (同書、一二頁。)
- (10) a.a.O., S.24. (同書、一四頁。)
- (11) a.a.O., S.22. (同書、一二頁。)
- (12) a.a.O., S.21. (同書、一一頁。)
- (13) Haffner, Sebastian: Anmerkung zu Hitler. München 1978, S.34ff. (ハフナー、セバスチャン『ヒトラーとは何か』、赤羽龍夫訳、草思社、一九七九年、二九頁以下。)
- (14) イエツケル、前掲邦訳書、一二六頁以下、一三二頁。
- (15) 池田浩士『虚構のナチズム——「第三帝国」と表現文化』、人文書院、二〇〇四年、一四頁。
- (16) 同書、一七頁。

- (17) 池田浩士編訳『ドイツの運命』（ドイツ・ナチズム文学集成1）、柏書房、二〇〇一年、四六八頁以下。
- (18) 田野大輔『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』、名古屋大学出版会、二〇〇七年、二一六頁。
- (19) 同書、二一八頁。
- (20) 同書、二二〇頁。
- (21) 同書、二二二頁。
- (22) 同書、二二二頁。
- (23) 同書、二二九頁。
- (24) 同書、二四七頁以下。
- (25) 同書、二三〇頁以下。
- (26) 同書、二三五頁。
- (27) 同書、二三〇頁以下。
- (28) 同書、二三五頁。
- (29) 同書、二三九頁以下。
- (30) 同書、二三六頁。
- (31) 同書、二四八頁。
- (32) 大川勇「カルヴァンとヒトラー——シュテファン・ツヴァイク『カルヴァンに抗するカステリヨ、あるいは権力に抗する良心』におけるカルヴァン像とヒトラー像の同一性について」、京都大学人間・環境学研究所社会システム研究刊行会『社会システム研究』、第一七号、二〇一四年、一頁以下を参照。

- (33) Meinecke, Friedrich: Die deutsche Katastrophe. Betrachtungen und Erinnerungen. 3. Aufl. Wiesbaden 1947, S.26. (マイネッケ、フリードリヒ『ドイツの悲劇』、矢田俊隆訳、中公文庫、一九七四年、三〇頁。)
- (34) 池田浩士『虚構のナチズム』、三七八頁。
- (35) 田野、前掲書、二四八頁。
- (36) J・P・スターン『ヒトラー神話の誕生——第三帝国と民衆』、山本尤訳、社会思想社、一九八三年、一四頁以下。この邦訳書の原本と独訳は以下のとおり。Stern, Joseph Peter: Hitler. The Führer and the People. Glasgow 1975. / J. P. Stern: Hitler. Der Führer und das Volk. Aus dem Englischen vom Autor und von Fred Wagner. München 1978.